



TITLE:

# 春秋公羊學の倫理思想 : 判斷方式について

AUTHOR(S):

日原, 利國

---

CITATION:

日原, 利國. 春秋公羊學の倫理思想 : 判斷方式について. 東洋史研究  
1964, 23(3): 237-276

ISSUE DATE:

1964-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152675>

RIGHT:

# 東洋史研究

第二十三卷 第三號 昭和三十九年十二月發行

## 春秋公羊學の倫理思想

——判斷方式について——

日 原 利 國

はじめに

行爲の善惡を論定するにあたって、二つの見方が考えられる。なぜそのような行爲をなしたか、すなわち行爲の動機や意圖を重視する立場と、いかなる行爲がなされたか、すなわち行爲の事實や他に及ぼす影響を主たる對象として判斷する立場とである。これは道德法則に對して、行爲の動機が合致すべきか結果が合致すべきかの問題であり、動機論と結果論の對立である。むろん動機と結果は、倫理學的には、行爲の二契機として二而不二の辯證法的關係にある、と見るべきであらう。が、道德的價值判斷において、行爲者の心的態度をより重視する立場と、行爲の外的事實をより重視する立場とに分けることも、あながち不可能ではなからう。

二つの立場の問題は、刑法理論にも見られる。主觀主義と客觀主義との對立である。

刑罰は、一定の行爲（犯罪）を原因として、行爲者（犯罪人）に科せられる制裁であるが、その場合、科刑の根據をいず

れに求めるか。犯罪人の動機ないし内的意思（主觀的心情）に求めるのが主觀主義であり、犯罪の外部的事實ないしそれによつて惹起された實害（客觀的事實）に求めるのが客觀主義である。兩者の對立は、しよせん、刑罰的評價の中心を犯罪意思（行爲者の心意）におくか、犯罪事實（行爲の結果）におくかの問題であり、道徳的評價における動機主義と結果主義の對立と密接不可分の關係にある、と云えよう。

右のような二つの見方が許されるならば、春秋公羊學の判斷方式は、そのいずれであらうか。

公羊學は、行爲の結果を論うことなくその動機を追究し、外的事實を閑却して内部心意のみを問題視する、徹底した動機主義である、と考えられる。行爲の道徳的評價が動機主義であるならば、行爲（犯罪）の刑罰的評價において主觀主義となるのは、理の當然であらう。

公羊學の論斷は、一言以てこれを蔽えば、「原心定罪」——心を原<sup>なす</sup>ねて罪を定む——（漢書王嘉傳・薛宣傳、後漢書應劭傳、隱元何休注）である。一般に、「事を誅せずして意を誅す」（定十三何休注）、あるいは「情を原ねて過ちを定め、事を赦して意を誅す」（後漢書霍詡傳）、また「心を論じて罪を定む」（鹽鐵論刑德）と云われる公羊學のそれは、内的心意のみを追求めるものであり（繁露玉杯）、主觀主義の典型というも過言でなからう。

公羊學の論斷は、徹底した動機主義・主觀主義である、との理解にたつ私は、一九六〇年一〇月、法制史學會において「漢代の刑罰における主觀主義」（草稿は愛知學藝大學研究報告「人文科學」十一に收載）と題する發表の際、この點に言及し、會員諸賢の批判を仰いだ。當日、私の發表に對して鋭く御教正くださった一人は、東京大學の仁井田陞博士である。博士は、一九六一年十一月、東洋史談話會の御發表にて、「中國古刑法、ことに春秋公羊學の刑法理論」と題して、改めてこの問題を取りあげられ、私の春秋解釋をきびしく反論せられた。

仁井田博士の御高見によると、「漢代公羊學では(1)第一次的に現實の個々の犯罪行爲と結果に基礎をおき、そこを立脚點として(2)犯罪人の意欲（故意過失その他、内心の理由）を總體的に取上げている」（東洋史談話會の際、配布された發表論文要旨

による)。また「春秋公羊學の刑法理論は、たとえ客觀主義の立場をもつたものとしても——ある場合、豫備陰謀を罰することとしていた點からみて——その客觀主義は極端な徹底したものではなかったことがわかる。それとは逆に、行爲を行爲者の惡性の徴表としてのみ見ようとする意味での主觀主義（徴表主義・犯罪徴表説）の立場をもつたものでもなかったと思われる。公羊學の理論には犯罪行爲に現實的意味を認めている點では客觀主義的傾向がある。内部的心意を重んじていた點は見のがせないが、そうであるからといって、その點を直ちに客觀主義の否定の根據とはできない」（仁井田陞博士「中國法制史研究」IV〔法と慣習・法と道徳〕六一八・六一九頁—東京大學出版會）と。すなわち、公羊理論は、行爲事實を無視して内部心意のみを問題とする主觀主義である、との私の解釋に對して、博士は、行爲事實と内部心意の兩者を重視していると解せられ、いずれかと云えば、客觀主義の立場をとられる。

學會で博士の御批判を拜聴し、その後御高著を拜讀して、私は多くを教えられ、感謝にたえない。私の拙劣な表現と粗漏な論旨が、博士をして私の意見を誤解せしめ、また、法理論に無知の私が、博士の御高見を曲解した非禮もあるかと懸念する。が、その點を考慮にいれても、なおかつ、公羊學の基本的な理解において、かなりの逕庭の存することを否めない。それで、今回、改めて公羊學の判斷方式について私の解釋をまとめ、博士の御批判にお答えするとともに、諸賢の御叱正を仰ぎたい、と願うものである。

—

周知のとおり、『春秋』は魯の隱公元年（722 B. C.）から哀公十四年（481 B. C.）に至る、十二公・二百四十二年間の國家の大事を編年的に記したもので、いわば魯の政治上の公式記録である。むろん、孔子とは何の關係もなく、ただか魯の歴史書にすぎない。しかし、これ（原春秋）に、孔子が獨自の理念と周到な論理とをもって筆削を加えた、春秋には孔子の精神（微言大義）が寓されている、との經學的認識を前提として春秋學が成り立つ。従って、春秋は單なる歴史的事實

の記録ではなく、事實を素材として理念を説いた書とされる。「人道おのね深く、王道備わる」、「萬物の散聚、皆ここに在り」との春秋觀は、すべての社會事象に妥當する判斷の根本原理を内包するものとして春秋を價值づける、經學的解釋の所産にほかならない。

春秋に寓せられた孔子の精神（春秋の義）がいかなるものか。これを解明せんとするのが春秋學である。春秋學＝春秋解釋學に二つの方法が現われた。記録された事實に託された内在的意味を、より純理的に究明する方向と、記録された事實とそれに關連する史實を通して、より歴史的に究明してゆく方向とである。純理的・哲學的な方向を代表するのが、公羊學（今文學）であり、歴史的・實證的な方向を選んだのが左氏學（古文學）である。左氏學の學界への登場は、公羊學よりかなり後のことであるが……。

公羊學者によると、春秋は「嫌疑を別ち、是非を明らかにし、猶豫を定め、善を善とし惡を惡とし、賢を賢とし不肖を賤しむ」、すぐれて「論斷の書」である。しかもそれは、「善は小なれども擧げざるなく、惡は小なれども去らざるなく」、「毫毛の善を采り、纖介の惡を貶する」きびしく道德的な判斷である。春秋が「禮義の大宗」と云われる所以であらう。春秋は事實を媒介とした理念の書、との認識は春秋學に共通する。だが春秋解釋の純理派＝公羊學にあっては、春秋は「事をかりて義を張ったもの」との前提が特に強く意識され、事―事實―を無視して、いちずに、その背後に潛在する義―理念―を究明しようとする要求が、強烈である。しかも、春秋は「義を重んじて事を重んぜず」との公羊學の主張は、譏譽褒貶・是非善惡の判斷において、殊に尖銳的に、かつ集約的に現われる。私が、春秋公羊學の倫理思想として、まず判斷方式をとりあげる所以である。

## 二

千八百餘條にすぎない春秋の記事に、あらゆる事象に妥當する判斷原理を寓することが、いかにして可能であったか。

それは一にかかつて「春秋の筆法」と云われる獨特の書法による。春秋（原春秋）を筆削するにあたって、孔子は嚴密な表現法則を設定し、それを數萬字・千八百餘條のすべてにわたって、慎重に適用した。一字・一句もゆるがせにせず、一字・一句の用法にさえ褒貶の意を示した、という。それ故、逆に、春秋の筆法を分析すれば、そこに寓された「春秋の義」が解明されることとなる。

春秋經文は、「隱公」元年春王正月、で始まる。私は、この一句の書法を手がかりに、事―記録―に寓された義―判斷原理―を剔抉することを試みよう。

春秋の書法に條例主義といわれるものがある。一定の義例（通例）を立て、「事同じければ辭を同じうする」——同一性格の事項は必ず同一の表現をもって記録する、という主張である。それによると、十二公の記事（經文）は、いずれも「元年春王正月、公即位」で始まるべきである。ところが、十二公の冒頭の記事は、

- |      |             |      |             |
|------|-------------|------|-------------|
| ① 隱公 | 元年春王正月、     | ⑦ 宣公 | 元年春王正月、公即位、 |
| ② 桓公 | 元年春王正月、公即位、 | ⑧ 成公 | 元年春王正月、公即位、 |
| ③ 莊公 | 元年春王正月、     | ⑨ 襄公 | 元年春王正月、公即位、 |
| ④ 閔公 | 元年春王正月、     | ⑩ 昭公 | 元年春王正月、公即位、 |
| ⑤ 僖公 | 元年春王正月、     | ⑪ 定公 | 元年春王、       |
| ⑥ 文公 | 元年春王正月、公即位、 | ⑫ 哀公 | 元年春王正月、公即位、 |

一見して明らかなのは「公即位」の有無である。定公を別扱いとすれば（定公は六月に即位す。「正月」のないのは即位の後れたため―定元傳・注）、他の諸公はいずれも元年の正月に即位している。即位したのが事實であるのに、隱公・莊公・閔公・僖公の四公において、「公即位」の記事をことさら除去したのはなぜか。

春秋の義例では、弑せられた君を繼いで立った場合には、元年正月に即位の禮を行なっても、「公即位」を書かない。

(齊の襄公に弑された桓公を繼いだ) 莊公・(公子慶父に弑された子般を繼いだ) 閔公・(公子慶父に弑された閔公を繼いだ) 僖公の三公はそれである。公羊傳に曰く。

〔經〕元年春王正月、〔傳〕公何以不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、春秋、君弑子不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、君弑則子何以不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、隱<sub>レ</sub>之也、孰隱、隱<sub>レ</sub>子也、 莊公元年

〔經〕元年春王正月、〔傳〕公何以不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、繼<sub>二</sub>弑君<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、〔注〕復發<sub>レ</sub>傳者、嫌<sub>二</sub>繼<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>踰<sub>レ</sub>年君<sub>二</sub>義異<sub>一</sub>故也、 明當<sub>二</sub>隱<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>一、 閔公元年

〔經〕元年春王正月、〔傳〕公何以不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、繼<sub>二</sub>弑君<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、下略 僖公元年  
 しかば、弑せられた君を繼いだのではないのに、隱公に「公即位」を書かないのはなぜか。また、弑せられた君を繼いだのに、桓公・宣公において、義例を破ってまで、「公即位」を書いた理由は如何。問題はここにある。  
 まず、桓公・宣公の場合から検討しよう。

#### A 其の意の如くす (一)

桓公は隱公を弑して位に即いた。これは事實である。とすれば、桓公は、弑せられた君(隱公)を繼いだわけであり、「公即位」を書かないのが春秋の義例である。にも拘らず、元年正月に「公即位」を敢て書いた理由は、

〔經〕元年春王正月、公即位、〔傳〕繼<sub>二</sub>弑君<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、此其言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>何、如<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>也、 桓公元年

君を弑してまで即位せんと欲した桓公の「意の如く」―意志のとおり―に書いたのだ、と公羊傳は説く。「其の意の如く」に書いた理由については、漢代公羊學の集大成者である後漢の何休(129―182)が、『公羊解詁』(公羊注)に、

弑<sub>レ</sub>君欲<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>位、故如<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>以著<sub>二</sub>其惡<sub>一</sub>、 桓公元年注

と。つまり、位に即いた事實を明かすためではなく、君を弑してまで「位に即かんと欲した」意志を重視して、春秋は「其の意の如く」に「公位に即く」と書き、それによって桓公の惡を明らかにしようとしたのである。このような公羊傳

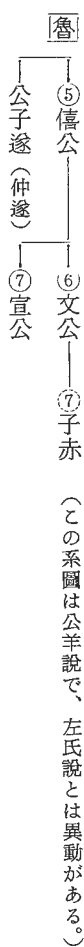
—何休の解釋は、前漢の董仲舒（176?—104? B.C.）にも見られる。『春秋繁露』に、

（桓公）其志欲立、故書「即位」、中略 從其志、以見其事也、從賢之志、以達其義、蘇輿云、義疑作「善」、從不肖之志、以著其惡、 玉英

と。要するに、「公即位」を敢て書いたのは、桓公が隱公を弑して立った事實を示すためではなく、隱公を弑して立とうとした意志を問題とし、その意志の如くに書いて、その（惡しき）意志を明らかにしたのである、というのが公羊傳—董仲舒—何休の解釋である。

## B 其の意の如くす (二)

篡弑の事實でなく、篡弑の意志の問題視は、宣公の場合、より明白である。



文公が薨じ（文公十八年二月）、繼いで立った子赤は間もなく弑せられた（文公十八年十月）。それを繼いだのが宣公である。宣公は弑せられた君（未だ年を踰えざるの君）を繼いで立ったわけである。従つて、みづから君（隱公）を弑して立った桓公と、弑せられた君（子赤）を繼いで立った宣公とは、事情が異なり、扱いを別にすべきかの如くである。

子赤を弑したのは公子仲遂である。これは宣公八年の經・傳および注から明瞭である（春秋は「公子仲遂卒す」とせず、公子の二字を除き、「仲遂卒す」と書いて貶している。これについて、公羊傳も「子赤を弑せしが爲に貶せらる」と明言している）。宣公に弑君の事實はない。しかし、公羊學では事實に意味はない。弑して立とうとする意志が、宣公に有ったか無かったか。問題はこの一點にある。

宣公には篡弑の事實はないが、篡弑の意志があった。弑君の事實のある（桓公）・なし（宣公）に關係なく、ましてや對象が成君（隱公）・未踰年の君（子赤）の違いに拘わりなく、君を弑せんとする意志—惡しき意志—に對して、春秋の筆誅



は加えられる（墓弑の意志の故に、何休は、宣公を墓弑者とみなす。宣元年正月・六月注、成三年注）。元年正月に「公即位」を書くことによって、春秋は、「君を弑して位に即かんと欲した」宣公の意志をあらわにしたのである。公羊傳に曰く、

〔宣公〕〔經〕元年春王正月、公即位、〔傳〕繼弑君不言即位、此其言即位何、其意也、〔注〕桓公墓

成君、宣公墓未踰年君、嫌其義異、故復發傳、

經義述聞云、其意上當有如字、桓元年傳、繼弑君不言即位、此其言即

位何、如其意也、何注曰、弑君欲即位、故如其意以著其惡、是也、云云

春秋が桓公・宣公に「公即位」を書いたのは、君を弑して即位したか否かの事實を問題にしたのでなく、「君を弑して位に即かんと欲した」意志を追求し、「その志に従い」、「その意の如く」に書いたのであった。このように、「其の意の如くして、以て其の惡を著わす」（桓元注）のが春秋の書法であるならば、他の事例ではどうか。検討してみよう。

### C 其の意の如くす (三)

鄭の國では、襄公が三月（成公四年）に卒し、繼いで立った費（悼公）は、その年の冬、兵を擧げて許を伐った。春秋に書して曰く、

〔經〕（冬）鄭伯伐許、

成公四年

春秋では「君存せば世子と稱し、君薨ずれば子某と稱し、既に葬れば子と稱し、年を踰ゆれば公と稱す」のが通例である（莊三十二公羊傳）。とすると、許を伐った時の費は、すでに襄公を葬りはしたが、「未だ年を踰えざるの君」であり、「鄭子」と稱すべきである。しかるに、春秋は「鄭子伐許」とせず、あえて爵（鄭は伯爵）を稱して「鄭伯伐許」と書いた。問題である。

いったい、父母の喪には、臣子は三年政に従わず、君はその門に呼ばざるが先王の制であり、春秋もこれを禮としている（宣元公羊傳・注、後漢書陳忠傳）。それは、悲哀慟恒の極にある臣子の「其の志の事に在らざる」がためである。故に董仲

舒は、

先王之制、有三大喪者、三年不<sub>レ</sub>呼<sub>二</sub>其門<sub>一</sub>、順<sub>二</sub>其志之不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>事也、書云、「高宗諒闇、三年不<sub>レ</sub>言」、居<sub>レ</sub>喪之義也、今縱<sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>是</sub>、奈何其父卒、未<sub>レ</sub>踰<sub>二</sub>年<sub>一</sub>、卽<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>喪舉<sub>レ</sub>兵也、春秋、以<sub>二</sub>薄<sub>レ</sub>恩且施<sub>二</sub>失其子心<sub>一</sub>、故不<sub>レ</sub>復得<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>子<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>之鄭伯<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>辱<sub>レ</sub>之也、

俞樾云、施讀爲弛、古字通用、

繁露竹林

と、春秋が「鄭伯」と書いた理由を説く。喪制の精神を尋ねるまでもなく、哀戚の情を盡くすは、孝子の心情として、自然であり當然である（白虎通喪服）。しかるに、費は孝子の心を失ない、成君の地位を樂しみ、喪中にありながら兵を起こして許を伐った。それ故、春秋は「鄭子」と書かず、あえて「鄭伯」と稱して、これに筆誅を加えたのである。何休は、未<sub>レ</sub>踰<sub>二</sub>年君稱<sub>二</sub>伯者<sub>一</sub>、時樂<sub>二</sub>成君位<sub>一</sub>、親自伐<sub>レ</sub>許、故如<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>著<sub>二</sub>其惡<sub>一</sub>、と。いまだ年を踰えざる君であるのに、成君たらんとする費の「其の意の如くして、以て其の惡を著わし」たのだ、という。

#### D 其の意の如くす (四)

隱公五年（冬十二月）に、「[經] 宋人伐<sub>レ</sub>鄭、圍<sub>二</sub>長葛<sub>一</sub>、

春秋では、侵・伐・戰・圍・入・滅は、一定の概念のもとに區別して用いられ（莊十公羊傳・注）、「兵を以て城を守る」を圍と云う。しかし「邑には圍と言わず」（隱五、傳六・二六、襄十二公羊傳）。たとい圍むという事實があつても、邑に對しては圍を用いず、伐を用いるのが常辭とされる。しかるに、ここに、鄭の邑にすぎない長葛への軍事行動を「長葛を圍む」と。公羊傳・何休注に曰く、

〔傳〕邑不<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>圍、此其言<sub>レ</sub>圍何、彊也、

〔注〕至<sub>レ</sub>邑雖<sub>レ</sub>圍當<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>伐、惡<sub>二</sub>其彊而無<sub>レ</sub>義也、必欲<sub>二</sub>爲得<sub>レ</sub>邑<sub>一</sub>、故如<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>言<sub>レ</sub>圍也、

隱公五年

鄭を攻撃した宋の意圖は、長葛を取得せんとするにあつた。それで春秋は「宋の意の如く」に、「長葛を圍む」と書き、

以て宋の強にして義なきを惡としたのである、という。

この何休の見解を支持する清朝の陳立(1809—1889)は、次の如く云う。すなわち、繁露(玉杯)の「春秋の微を好むは、其の志を貴ぶを與てなり」を引用し、それにつづけて、

鄭伯志在滅段、故如其意書克、宋人志在得長葛、故如其意言圍、所謂逆而罪之、不如此徐而味之也、春秋之所惡者、不任德而任力、故表其意、以惡其疆也、

公羊義疏隱公五年

右の文中、「鄭伯の志、段を滅するに在り。故に其の意の如くして『克す』と書す」とは、隱公元年(夏五月)の「〔經〕鄭伯克段于鄆」における克に關する發言である。公羊學と左氏學とは克の字の用法も異なる。公羊では、克は殺であり(隱元公羊傳)、軍隊を發動した鄭伯(鄭の莊公)の意志が、段(共叔段)を殺さんとするにあつたので、「其の意の如く」に「克す」と書した、という。つまり、長葛を圍んだ宋人の場合も、段を克した鄭伯の場合も、いずれも「其の意の如く」「其の志に従つて」書き、もつてその強惡を現わさんとしたのである。

さて、「鄭伯克段于鄆」においては、鄭伯の意志そのままに克と書した、という。これは、いわば鄭伯を主體としての解釋である。次に、私は、この經文に寓せられた春秋の義を、段の側から吟味してみよう。

### E 其の意の如くす(四)——國に當らんと欲す——

段(共叔段)は莊公(鄭伯)の弟であるが、春秋は、

〔經〕鄭伯克段于鄆、

隱公元年

と書き、「弟段」と云わない。例えば、襄公三十年には、「〔經〕天王殺其弟年夫」と弟の字を冠している。にも拘らず、ここには、段とのみ書いて、弟の字がない。これについて公羊傳・何休注に曰く、

〔傳〕段者何、鄭伯之弟也、何以不稱弟、當國也、〔注〕欲當國爲之君、故如其意、使如國君、氏上鄭、所以見段之逆、

隱公元年

「氏ニ上鄭」とは、上の鄭伯の鄭を氏とするの謂である。鄭を段の氏とすれば、鄭段となり、國君のごとき稱呼になる。段は鄭伯の弟であるのに、春秋が、弟の字を去って「鄭」段」と、あたかも一國の君であるかの如く書いたのは、段が「國に當り之が君たらんと欲した」ので、「其の意の如く」にしたのである、という。

右のごとく、國に當り君たらんと欲したが故に、「其の意の如く」して、國を以て氏とした書例は、春秋には少なくない。衛州吁・齊小白および王猛など、それである。

イ 【經】 衛州吁弑其君完、

隱公四年

桓公完  
衛莊公——公子州吁  
宣公晉  
例え、【經】齊公子商人、弑其君舍（文十四）、などでは、公子を氏として「公子商人」と書かれている。然るに、公子州吁の場合は、國を以て氏として「衛州吁」と書いている。これについて、公羊傳・何休注に曰く、

【傳】曷爲以國氏、當國也、  
上鄭、所見段之凶逆、是也、

隱公四年

【注】與段同義、徐疏曰、即上元年注云、欲當國爲君、故如其意、使如國君、氏

州吁には、國に當り君たらんとする意志があつたので、「其の意の如く」にして「衛州吁」と書いた。鄭段の場合と同じである、という。

ロ 【經】 齊小白入于齊、

莊公九年

たとえば、【經】宋公之弟辰、及仲佗・石彊・公子池、自陳入于蕭以叛（定十一）、などでは、「公子池」と公子を氏としている。しかるに、公子小白の場合は、國を以て氏として「齊小白」と書かれている。公羊傳・何休注に、

【傳】曷爲以國氏、當國也、【注】當國故先氏國也、公羊義疏曰、按此與隱元年鄭段、四年衛州吁同義、莊公九年

小白は國に當り君たらんと欲したので、「其の意の如く」に「齊小白」と書いたのであり、鄭段・衛州吁と同義である、という。

ハ 「經」劉子・單子、以王猛、居于皇、

昭公二十二年

周王室にあつては、景王が夏四月（昭二十二）に崩じ、葬がすんだ直後であつた。この時、猛は未踰年の王であり、當然「子」と稱すべきである（莊三十二公羊傳）。にも拘らず、ここに「王猛」と書いてゐる。その理由は、公羊傳・何休注に、

「傳」其稱王猛何、當國也、〔注〕時欲當王者位、故稱王猛、見當國也、公羊義疏曰、隱元年傳、當國也、注、

欲當國爲之君、故如其意、使如國君、氏上鄭、所見見段之逆、時猛亦欲當王者位、故如其意、稱王猛、見當國也、

昭公二十二年

以上列擧した鄭段・衛州吁・齊小白、および王猛の書例は、いずれも事實をでなく、意志を問題視したものであり、「國に當り君たらんと欲した」ので、春秋は、「其の意の如く」に書いたのである。

とすれば、「國に當り君たらんと欲せざる」場合は、——たとい國に當り君たる事實があつても——欲せざる「其の意の如く」に書き、以てその意なきを明らかにすべきであらう。

F 其の意の如くす ㄅ——其の意當らざるなり——

昭公十三年の春秋に、曰く、

〔經〕夏四月、楚公子比、自晉歸于楚、弑其君虔于乾谿、楚公子棄疾、弑公子比、

經文の背景をなす事件の概略は次のようである。楚の靈王虔は無道で、高壯な臺を乾谿に作りつつあつたが、三年費してまだ出來上らなかつた。この時、公子比が晉から戻つた。野心家の公子棄疾は、比を脅かして位につけ、乾谿の役に從う者を田里に歸した。ために靈王は經れて死んだ。棄疾は比を殺して位についた。これが平王居である。

さて公子比は、公子棄疾に欺かれ脅かされて位についたのであつたが、そのため靈王虔を死に至らしめた。春秋は、比に弑君の汚名を加え、「公子比、其の君虔（靈王）を乾谿に弑す」と書くことによつて、死を賭しても立つことを拒否すべきが、臣子の義であることを教える。が、そのことは他稿にゆづり、ここでは、まず、「楚公子比、自晉歸于楚」に

おける「歸」の書法について考察しよう。

他國に出で自國に戻る場合、春秋は、その者の心意の善惡にしたがって、復歸・復入・入・歸の四色に書き分ける。「出ずるとき惡、歸るとき惡なき」を復歸、「出ずるとき惡なく、入るとき惡ある」を復入、「出ずるときも入るときも惡」なるを入、「出ずるときも入るときも惡なき」を歸という。(桓十五公羊傳)。

ところで、經文には「晉より楚に歸る」と歸が用いられている。その理由は、

〔傳〕此弑<sub>レ</sub>其君、其言<sub>レ</sub>歸何、歸無<sub>レ</sub>惡<sub>ニ</sub>於弑立<sub>一</sub>也、歸無<sub>レ</sub>惡<sub>ニ</sub>於弑立<sub>一</sub>者何、靈王爲<sub>ニ</sub>無道<sub>一</sub>、作<sub>ニ</sub>乾谿之臺<sub>一</sub>、三年不<sub>レ</sub>成、

楚公子棄疾、脅<sub>レ</sub>比而立<sub>レ</sub>之、然後令<sub>ニ</sub>于乾谿之役<sub>一</sub>、曰、比已立矣、後歸者、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>復<sub>ニ</sub>其田里<sub>一</sub>、衆罷而去<sub>レ</sub>之、靈王經而死、〔注〕時棄疾詐告<sub>レ</sub>比得<sub>ニ</sub>晉力<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>以歸、至而脅立<sub>レ</sub>之、中略言<sub>レ</sub>歸者、謂<sub>ニ</sub>其本無<sub>ニ</sub>弑<sub>レ</sub>君而立<sub>レ</sub>之意<sub>一</sub>、昭公十三年

晉に往き楚に戻った比には、もとより「君を弑して立とうとする意は無か」った。故に、春秋は「歸」を用いて、その意志のなきことを明らかにしたのである。

つぎに「楚公子棄疾、弑<sub>ニ</sub>公子比<sub>一</sub>」における「公子比」の書法が問題となる。

比が位につき、虔(靈王)が死んだのは夏四月(昭十三)のことである。棄疾が比<sub>ニ</sub>君を弑した<sub>一</sub>のは、その直後であった。従って棄疾が弑した君は、「未だ年を踰えざる君」であつたわけである。

未だ年を踰えざる君を弑した書例は、〔經〕晉里克弑<sub>ニ</sub>其君之子奚齊<sub>一</sub>、(傷九)、の如くである。「其の君の子奚齊を弑す」とは、「未踰年の君を弑するの號なり」と公羊傳も説いている(傷九)。

しかるに、ここに「公子比」と稱し、比を君(未踰年の君)とせず、公子とする書法を用いている。それは、公羊傳に、

〔傳〕比已立矣、其稱<sub>ニ</sub>公子<sub>一</sub>何、其意不<sub>レ</sub>當也、〔注〕据<sub>ニ</sub>上傳<sub>一</sub>、知<sub>ニ</sub>其脅<sub>一</sub>、

昭公十三年

と。前掲の傳文から、比は棄疾に脅迫され強制されて、心ならずも立った情況は詳かである。比には、もともと、位につき國に當らんとする意志はなかった。それ故、春秋は——位に即き國に當つた事實があるにも拘らず、あえて君號を用

いず、公子と稱して、「其の意當らざる」を明らかにしたのである。

その意志の奈邊にあるやを審覈し、「位に即き國に當るを欲せざりし」ものは、「其の意の如く」に書いた例として、次のごときもある。

〔經〕五月癸丑、公會晉侯・齊侯・宋公・蔡侯・鄭伯・衛子、盟于踐土、  
 〔注〕衛稱子者、起叔武本無即位之意、徐疏曰、衛侯爲王伯所逐、而立叔武、叔武卽是成君、何不稱侯、而作未踰年之君號、欲起其本無即位之心故也、  
 僖公二十八年

四月（僖二十八）、晉の文公は、衛の成公を放逐して弟の叔武を立てた。五月、衛侯（叔武）は踐土の會に出席した。六月、成公は衛に復歸し、「叔武は我を篡す」と怒って叔武を殺した。

さて、叔武には位に即くの意志なく、晉文公に固辭したのであった。「而れども他の人立たば、成公の反るを得ざるを恐る。故に是に於て己立ち、然る後、踐土の會を爲し、治めて成公を反した」「讓國の賢者」である（僖二十八公羊傳）。然るに、「我を篡す」と誤解した成公は、叔武を弑殺した。だが叔武弑殺のことは、春秋に記載しない。「春秋は賢者の爲に諱む」ので（莊四、僖十七・二十八、昭二十公羊傳）。賢者叔武の眞意も、成公の罪惡も、春秋の筆法に寓される。すなわち、春秋は、踐土の會において、成君である叔武に——衛侯と書くべき所を——あえて「衛子」と未踰年の君號を稱して、叔武には「位に即き國に當るの意なかりし」を明らかにしたのである。

### 三

意志（善意志・惡意志）の有りし者は有りしごとく、無き者は無きがごとく、すべて「其の意の如く」に書き、以てその善惡をあらわすが、春秋の基本的な主張であるとすれば、①その意志の發生した時期、②その意志の強弱の度合いをも審覈し、なんらかの筆法によって書き分けるべきであろう。何となれば、行爲における意志を根據として、その善惡を論

定する立場にたつならば、意志の發生の時期、強弱の程度によって、評價は變わるはずであり、たんに意志の存否だけを問題とする素朴な段階にとどまる限り、判斷の公正と嚴密を失するであらうから。

### ① 意志の發生の時期

一見、この上ない善き行動をなしながら、**㊸**中途から邪心を起こした場合と、**㊹**當初から邪心を懷いていた場合とについて、春秋の書法と評價を考察することとしよう。

**㊸** 宣公十年 (593B.C.) 五月、陳の夏徵舒がその君靈公を弑した。だが陳人は自力で夏徵舒を討つことができなかった。また大國の齊や晉も、晏然として、破邪の劔を振ろうとしなかった。この時 (宣十一年十月)、楚の莊王は義兵を起して陳に攻め入り、弑君の賊・夏徵舒を討ちとった。

いったい、春秋では、その君を弑するのはその父を弑するとともに、惡の極とされ、君父を弑した賊を討つことは、臣子の道德的責務として強く要請される (隱十一公羊傳)。公羊傳には、君父の讐は百世といえども復すべきが明記され (莊四)、「讐を復せざるは臣子にあらず」と斷じ (隱十一公羊傳)、讐を復した者は「賢者」と稱える (莊四公羊傳)。それ故、陳のごとく自力で賊を討つ能わざる場合、代つて賊を討った者は、善事として表彰される (繁露・楚莊王)。然るに、宣公十一年、冬十月に、

〔經〕楚人殺陳夏徵舒、丁亥、楚子入陳、

と。春秋では「入るには例として時を書し、傷害多ければ月を書す」 (宣十一徐疏)。ここには「丁亥 (の日)、楚子陳に入る」と日を書いてある。その理由は、何休によると、

日者、惡<sup>スルハ</sup>莊王討賊之後、欲<sup>スルハ</sup>利<sup>スルハ</sup>其國、

宣公十一年注

楚の莊王は、賊の夏徵舒を誅殺した後、陳國を利せんとする邪心を起こした。特に「丁亥」と日を書いたのは、その邪心を筆誅するためである、という。公羊疏にも、



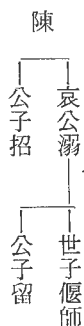
先書討賊、乃言入陳者、莊王討賊之後、始有下利陳國之意、故後書入也、

昭公元年徐疏

莊王は、もと邪惡な心意を懷き、義舉に託してそれを遂げようとしたのではない。賊を討った後に、はじめて邪心を生じたのである。この間の情況を明らかにするために、春秋は、まず「楚人、陳の夏徵舒を殺す」と書いて賊を討ったことを表彰し、後に「丁亥、楚子陳に入る」と書いて貶絶を加えたのである。

⑧ 昭公八年(634B.C.)春、陳の公子招は孔瑗をして世子偃師を殺させ、公子留を立てた。ために哀公は縊れて死んだ。楚の靈王は、冬十月、弑君の賊・公子招を執えて越に追放し、孔瑗を殺し、哀公の葬儀を行なったが、遂に陳國を滅してしまった。この

ことは春秋に、



〔經〕冬十月壬午、楚師滅陳、執陳公子招、放之于越、殺陳孔瑗、葬陳哀公、〔注〕日者、疾詐譖滅人也、

不舉滅爲重、復書三事言執者、疾譖託義、故列見之、託義不先書者、本懷滅心、昭公八年

滅(國を滅した)の場合は、通例として月のみを書く(莊十・十三)。にも拘らず、ここに「壬午(の日)、楚師、陳を滅す」と日を書いている。それは、楚師(楚の靈王)が賊を討つと詐って兵を進め、陳を滅してしまったことを疾むからである。また春秋では、最も重大事である滅を書けば、それ以下のことは書かないのが通例である(襄六何休注)。しかるに、ここに「陳の公子招を執えて之を越に放ち」「陳の孔瑗を殺し」「陳の哀公を葬る」の三事を列記している。それは、三事がかこつけの偽装であることを疾むためである、という。

さて、陳に進入した楚の靈王は、もちろん、初めに三事を行ない、最後に陳を滅したのであった。ところが春秋の文は、三事の列記を後にして、「陳を滅す」を筆頭に掲げた。それは、靈王が「本、陳を滅せんとする心を懷いて」おったことを明示し、以てその心意の惡辣を強く彈劾せんとしたのである。

宣公十一年(④の事例)、楚の莊王が夏徵舒(弑君の賊)を討ち陳に侵入したのと、ここ(⑧の事例)の楚の靈王が公子招

（弑君の賊）を討ち陳を滅したのとは、外的事實は相似ている。しかし、その内的心情が違ふ。いわゆる「迹同じくして心異なる」ものである。心異なれば評價は異なる。評價の違いは筆法によって書き分ける。すなわち、莊王は賊を討った後に邪心を起こしたので、春秋は、賊を討つの義舉をまず書き、後に「丁亥、陳に入る」を書いてこれを譏刺した。

ところが、靈王は當初から陳を滅せんとする邪心を懷いておつて、賊を討つの義舉にかこつた。それで春秋は「壬午、陳を滅す」をまず書き、後に賊を討つの事を列記してそれは偽装にすぎざるを示し、以てその本心の甚惡を明證したのである（昭八何注、昭元徐疏、昭八公羊義疏）。

なお、もと邪心を懷いて、弑君の賊を討つに託した㊦の事例として、次のごときもある。昭公十一年に曰く（楚子虔は楚の靈王。蔡侯般（靈公）は、襄公三十年に、その君景公を弑した賊である）。

〔經〕夏四月丁巳、楚子虔誘蔡侯般、殺之于申、〔傳〕楚子虔何以名、絕、曷爲絶之、爲其誘討也、此討賊也、雖誘之則曷爲絶之、懷惡而討、不義、君子不討也、〔注〕内懷利國之心、而外託討賊、故不與其討也、賊、而責其誘詐也、

## ② 意志の強弱の問題

行爲における意志の強弱の問題として、㊧みずから欲する積極的意志とやむを得ざるの消極的意志、㊨我が意を他に及ぼす他動的意志と他の意に従う被動的意志、の二つの場合について検討する。

㊩及と譬。外觀上、相似た行爲にも、仔細に考察すれば、違つた動機、異なつた意志の存することは否めない。いわゆる善事を同じくよき意志（動機）をもつて、あるいは、いわゆる惡事を同じくあしき意志（動機）をもつて爲した場合でも、そこには、より積極的なものとより消極的なものと相違もある。よき積極的な意志と消極的な意志とを共に善と一括し、あしき積極的な意志と消極的な意志とを共に惡と一概するのは、餘りに粗漏である。意志のあり方の違いによつて、善の輕重・惡の深淺が區別される以上、春秋としては意志の積極・消極を厳しく書き分けなければならない。また、

それによつてはじめて「其の意の如くして、以て其の善惡を著わす」との命題に、十分な意味で應えうるわけである。

春秋の「及」と「暨」との書法は、まさにこのために準備されている。みずから欲する積極的な意志は「及」、やむを得ざる消極的な意志は「暨」とされる。隠公元年に、

〔經〕三月、公及邾婁儀父盟于昧、〔傳〕及者何、與也、會・及・暨、皆與也、曷爲或言會、或言及、或言暨、會猶最也、注、最、聚也、直自若平時聚會、無他深淺意也、及猶汲汲也、暨猶暨暨也、及我欲之也、暨不我得已也、〔注〕學及暨二者、明當隨意善惡而原之、欲之者、善重惡深、不得已者、善輕惡淺、所以原心定罪、

及・暨によつて意志のあり方が辨別されれば、行爲の善惡の程度もおのずから定まるであらう。圖式化すると、左の四つのケースとなる。

(イ) 汲汲として爲した善事は、善重し。  
(ハ) 已むを得ず爲した善事は、善輕し。

(ロ) 汲汲として爲した惡事は、惡深し。  
(ニ) 已むを得ず爲した惡事は、惡淺し。

上掲の隠公元年の〔經〕公及邾婁儀父盟于昧、は(イ)の適例であり、徐疏は「其の善事に汲汲なるを以て、故に善重しと曰うなり」と説く。以下、徐疏(隠元)によると、

〔經〕公會晉侯及吳子于黃池、

哀公十三年

が(ロ)の例とされ、「其の惡事に汲汲なるを以て、故に惡深しと曰うなり」と説く。

(イ)の例として、〔經〕春王正月、暨齊平、

昭公七年

(ロ)の例として、〔經〕(冬)宋公之弟辰、暨宋仲佗・石彊、出奔陳、

定公十年

最後の事例にみえる宋公の弟の辰は、冬(定十)、仲佗・石彊らと陳に出奔し、春(定十一)、仲佗・石彊らと陳から蕭に

入って叛いたのである。ところで、出奔した時の辰は、實力者の仲佗に誘なわれた已むを得ざるものであったが（定十何注）、陳から蕭に侵入する時は、みずから欲する積極的な意志であった。それで春秋は、冬には暨を用いたのに、春には及を用いる。曰く、

〔經〕春、宋公之弟辰及、仲佗・石彊・公子池、自陳入于蕭以叛、〔注〕辰言及者、後汲汲、當坐重、定公十一年

むろん、多くの重臣と謀って陳に出奔し、陳から蕭に入って叛くは、不埒である。故に、冬の經文で、國名の宋の字を再出して「悉く國人を帥いて去らんと欲するを惡」とし（定十冬何注）、また春の經文で入を用いて「出ずるときも入るときも惡」（桓十五公羊傳）なることを表わした。この用字法によって、惡事をなさんとする惡しき意志の有ることを明らかにし、さらに、惡しき意志の強弱を及と暨で書き分けて、惡の深きと惡の淺きとを詳かにしたのである。

春秋には及・暨の用例は枚舉にいとまない。左に及の用いられた經文の若干を列舉する。

〔經〕夏、公及、宋公遇于清、〔注〕言及者、起公要之、明非常遇也、隱公四年

〔經〕春二月、公會紀侯・鄭伯、己巳、及、齊侯・宋公・衛侯・燕人戰、〔注〕言及者、明見我爲主、故得汲汲敗勝之文、桓公十三年

〔經〕夏、師及、齊師圍成、〔注〕言及者、起魯實欲滅之、莊公八年

〔經〕公及、齊侯・宋公・陳侯・衛侯・鄭伯・許男・曹伯、會主世子于首戴、〔注〕言及者、因其文可得見汲汲也、

〔疏〕及、汲汲之文、故隱元年傳云、及猶汲汲、及我欲之、然則此言及者、因會主世子之經、得見魯侯汲汲于齊桓矣、僖公五年

〔經〕秋、衛人及狄盟、僖公三十二年

〔經〕晉荀林父帥師、及、楚子戰于郟、宣公十二年

〔經〕春王三月、及<sub>レ</sub>齊平、

定公十年

①以と行。及・暨に類似した書法に以と行がある。これは、彼と我とが行動を共にした場合、その行動をひき起こした主體的意志が、彼我いずれにあったかを問題とし、いわば他動的意志と被動的意志とを書き分けようとするものである。彼をして我が意を行なわしめた場合を「以」、我をもつて彼の意に従った、つまり彼の意を行なった場合を「行」という。

例えば、桓公十四年(686 B.C.)、宋・齊・衛・蔡・陳の連合軍が鄭を攻撃した。これを春秋は、

〔經〕宋人以<sub>二</sub>齊人・衛人・蔡人・陳人<sub>一</sub>、伐<sub>レ</sub>鄭、

桓公十四年

と。宋人が齊人らを「以<sub>て</sub>」と書いた背景には、次のことき事情がある。

鄭の女

太子忽(昭公)

鄭公

突(厲公)

宋の女

〔宋の外甥である〕

に、春秋は「以」を用いた。これについて、公羊傳・何休注に、曰く、

宋の莊公は鄭の昭公を追放して突を立てた(桓十一年九月)。ところが、突は宋の路を拒み、かえつて宋を攻めた(桓十二年十二月)。怒った宋の莊公は、齊など四國と結び、四國をひきいて鄭を伐つに至った(桓十四年十二月)。要するに、鄭を伐たんと欲したのは宋であり、四國を動かしたのは宋の意志である。四國は宋の意志に従い、宋の意志を行なったにすぎない。意志のあり方のこの相違を辨別するため

〔傳〕以者何、行<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>也、

〔注〕以<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>人<sub>一</sub>曰<sub>レ</sub>行、言<sub>二</sub>四國行<sub>一</sub>宋意<sub>二</sub>也、宋前納<sub>レ</sub>突求<sub>レ</sub>賂、突背<sub>レ</sub>恩伐<sub>レ</sub>宋、故宋

結<sub>二</sub>四國伐<sub>レ</sub>之、四國本不<sub>レ</sub>起<sub>二</sub>兵<sub>一</sub>、當<sub>二</sub>分<sub>二</sub>別<sub>一</sub>之、故加<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>也、

桓公十四年

春秋にはこの用例は數多く見える。そのうち若干を左に列擧する。

〔經〕公以<sub>二</sub>楚師伐<sub>レ</sub>齊、取<sub>レ</sub>穀、

〔注〕言<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>者、行<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>、別<sub>二</sub>魯兵<sub>一</sub>也、

僖公二十六年

〔經〕遂以<sub>二</sub>夫人婦姜<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>齊<sub>一</sub>、

〔注〕言<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>者、見<sub>二</sub>行<sub>一</sub>遂意<sub>二</sub>也、

宣公元年

〔經〕僖如<sub>二</sub>以<sub>二</sub>夫人婦姜氏<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>齊<sub>一</sub>、

成公十四年

昭公二十二年

〔經〕劉子・單子以王猛、居于皇、

〔注〕不舉猛爲重者、時猛尚幼、以三子爲計勢、故加以、以者、行三子意辭也、

〔經〕蔡侯以吳子及楚人、戰于伯莒、

〔注〕言以、明爲蔡故也、與桓十四年同、

定公四年

#### 四

以上のごとく、春秋は行爲における意志を重視し、その有無を更にそのあり方を審覈して、それを根據に善惡を論定する。畢竟、行爲は意志の問題に濾過され、意志の善惡がそのまま行爲の善惡を決定する。評價の根據を意志のみに求め、厳しく道徳的な判斷である。

しからば、何故、それほどに意志を重視し、意志のみを追求するのか。春秋にあっては、意志はすぐれて價值概念である。よき意志はそれ自體價值であり、無制約的に善とされ、あしき意志はそれ自體非價值であり、斷固として禁絶さるべきものであるから……。

もし、よき意志がそれ自體價值ならば、いかにしてそれを論證するのか。論證のためにいかなる書法が用意されているのであろう。いったい、よき意志のある場合（あしき意志の場合は次節にて）、考えられうるケースは、次のごとくである。

よき意志が①外的動作となつて（一）よき結果を、あるいは（二）あしき結果を招く（行爲の終了）。②その動作が途中で挫折する（行爲の中断）。③よき意志が現實的な動作とならない（行爲の未着手）。

類別したケースのそれぞれについて、春秋の筆法を分析するならば、よき意志をそれじたい價值とする論理が解明されるであらう。

#### ①行爲の終了（一）よき結果

よき意志による行動が、よき結果をもたらせば、社會から稱讃されるであらう。だが春秋は、結果のためでなく、よき意志の故に「其の意の如く」に書いて、その行爲を表彰する。これは既に論述したところである。

## (二) あしき結果

よき意志による行動が、あしき結果を招けば、一般には惡事と非難されるかもしれない。が、意志のみを評價の對象とする立場は、結果の如何にかかわりなく、よき意志の故に善として稱揚する。例えば、文公二年に、

〔經〕夏六月、公孫敖會宋公・陳侯・鄭伯・晉士穀、盟于垂斂、〔注〕盟不<sub>ひせ</sub>日者、欲<sub>レ</sub>共盟誅<sub>二</sub>商臣<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能誅、猶爲<sub>レ</sub>疾惡故也、褒與<sub>二</sub>信辭<sub>一</sub>也、

會盟に、「夏六月」として日を書かないのは、「褒めて信辭を與した」のである、という。(莊十三公羊傳)。

魯の公孫敖は宋公以下と盟つて、楚の商臣(世子商臣がその君成王髡を弑したこと文公元年に見ゆ)を誅そうとして義兵をおこした。だが商臣の銳鋒に敵せず、人命と物資のいたずらな消耗に終わった。しかし、惡を疾み義をなさんとしたその意圖を善とする春秋は、垂斂の會に信辭を爲してこれを表彰する。

また、成公十八年に、

〔經〕十有二月、仲孫蔑會齊侯・宋公・衛侯・邾婁子・齊崔杼、同盟于虛打、〔注〕不<sub>ひせ</sub>日者、時欲<sub>二</sub>行<sub>レ</sub>義爲<sub>レ</sub>宋誅<sub>二</sub>魚石<sub>一</sub>、故善而爲<sub>二</sub>信辭<sub>一</sub>、

諸侯は宋のために逆臣魚石を誅し義を行なわんとした。結局、魚石を誅することはできず、かえつて魚石を庇護する楚の横暴に屈した(成十八、襄元公羊傳・注)。だが春秋は、そのよき意圖を顯彰するため、虛打の會盟に日を書せず、月のみを書して信辭をなした。

右の二例は、結果的には失態であつたのに、そのよき意圖のため春秋の稱揚する所となつたのであるが、この評價のデ・イピカルなものとして、泓の戰に慘敗した宋の襄公への絶讃がある。宋襄の仁と云われるそれである。

〔經〕冬十有一月、己巳朔、宋公及楚人戰于泓、宋師敗績、  
 正也、何正爾、宋公與楚人期、戰于泓之陽、楚人濟泓而來、有司復曰、「請迨其未畢濟而擊之」、宋公曰、「不可、吾聞之也、  
 君子不厄人、吾雖喪國之餘、寡人不忍行也」、既濟、未畢陳、有司復曰、「請迨其未畢陳而擊之」、宋公曰、「不可、吾聞之也、  
 君子不鼓不成列」、已陳、然後襄公鼓之、宋師大敗、故君子大其不鼓不成列、臨大事而不忘大禮、有君而無臣、  
 以爲雖文王之戰、亦不過此也、  
 僖公二十二年

春秋は、偏戰ならば日を書き、詐戰ならば月を書くを義例とする（隱六何注）。偏戰とは「日を結び地を定め、おのの一面に居り、鼓を鳴らして戦い、あい詐らざる」をいう（桓十何注）。泓の戦は偏戰である。故に經文に「己巳」と日が書かれている。しかしここには、更に重ねて「朔」と。それは「春秋、辭繁にして殺かざるは正なり」。つまり、泓の戦を「正道を得てもっとも美わしきもの」とし（僖二十二何注）、それを明らかにするためにこの書法を用いた。

死生興亡の「大事に臨んで大禮を忘れず」（禮の重んずる所は、其の志に在り——繁露玉杯）、「人を阨に困しめる」に忍びず、「いまだ陳列を成さざるものを攻め」ようとしなかった宋襄の仁を、公羊學は、「君子の仁」と稱える。

一般には、力がすべてを決する戰陳において仁を固執し、ために敗績した現實的迂遠が嘲笑され、多くの將兵を死傷させた人君の責務が追求され（左氏學・穀梁學）、宋襄の仁は「婦人の仁」と揶揄されるであらう。だが公羊說の心情倫理は——例えば「人君と爲りて其の師を棄つ、其の民たれか以て君と爲さんや」（僖二十三穀梁傳）と宋襄のそれを眞向から否定する見解に對して、

孔子曰、「君子去仁、惡乎成名、造次必於是、顛沛必於是、未有三守正以敗而惡之也、穀梁注所引何休穀梁廢疾と宋襄を辯護する。結果的には無慘な敗北を喫したが、その仁——心的態度の崇高の故に、「文王の戦といえどもこれに過ぎず」とまで絶讃するのが、公羊學の立場である。

さて、よき意志——賊を伐とうとした義（文二、成十八）、人を阨に困しめるに忍びない仁（僖二十二）——の前には、敗



戦による人君の責任も問われない。しかれば、臣下が君を無みし法を犯す結果を生じた場合、いかなるものであろう。

公羊學は概して君臣關係をきびしく律する。何休のごときは、「君、君たらずと雖も、臣以て臣たらずるべからず」（宣六注）と一方面的な犠牲道德としての忠を説くことすらある。「大一統」（隠元公羊傳）の形で君主の直線の支配を理論づける公羊は、

大夫無<sub>二</sub>遂事<sub>一</sub>、 桓公八年、莊公十九年、僖公三十年、襄公二・十二年

大夫之義、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>專執<sub>一</sub>也、 定公元年

と、大夫の専行權を否定し、臣下の獨斷を戒しめる。しかるに、宣公十五年に、曰く、

〔經〕夏五月、宋人及<sub>二</sub>楚人<sub>一</sub>平、 〔傳〕外平不<sub>レ</sub>書、此何以書、大<sub>二</sub>其平<sub>一</sub>乎己<sub>二</sub>也、 注、己、二大夫、何大<sub>二</sub>乎其

平<sub>二</sub>乎己<sub>一</sub>、中略 故君子大<sub>二</sub>其平<sub>一</sub>乎己<sub>二</sub>也、注、大<sub>二</sub>其有<sub>一</sub>仁恩、

楚の莊王は宋軍を圍んだが、防備が固く勝を制するに至らなかった。この時、司馬子反が敵情の偵察に出向き、折しも楚軍の狀況をうかがう宋の華元と相見えた。子反問うて「いかん」と。華元答えて「子を易えて食らい、骸を折いて炊ぐ」と。子反曰く「無慘なや／＼然れども我が軍も七日の糧を残すのみ。此れを盡して勝たざれば、歸り去らんとす」と。兩人掛して去る。――顛末を聞いて怒った莊王も、七日の後、やむなく軍を引いた。「外、平ぐを書せざる」は春秋の義例である。だが兩人による和平を大とする春秋は「宋人（華元）、楚人（司馬子反）と平ぐ」と特に書した、という。

何故、二大夫による和平を是認し、君主を無視した專斷を問題としないのか。公羊も長文の傳を發したが、董仲舒も詳論している。曰く、

司馬子反爲<sub>二</sub>其君<sub>一</sub>使、廢<sub>二</sub>君命<sub>一</sub>與<sub>レ</sub>敵情、從<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>請與<sub>レ</sub>宋平、是內專<sub>レ</sub>政而外擅<sub>レ</sub>名也、專<sub>レ</sub>政則輕<sub>レ</sub>君、擅<sub>レ</sub>名則不<sub>レ</sub>臣、而春秋大<sub>レ</sub>之、奚由哉、 曰、爲<sub>二</sub>其有<sub>一</sub>慘怛之恩、不<sub>レ</sub>忍<sub>二</sub>下<sub>一</sub>餓<sub>二</sub>一國之民、使<sub>二</sub>中<sub>一</sub>之相食、推<sub>二</sub>恩者<sub>一</sub>遠之而大、爲<sub>レ</sub>仁者自然而美、今子反出<sub>二</sub>己之心<sub>一</sub>、矜<sub>二</sub>宋之民<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>其間<sub>一</sub>、故大<sub>レ</sub>之也、 難者曰、略 曰、上略 今子反往視<sub>レ</sub>宋、聞<sub>二</sub>人相

食、大驚而哀之、不意之至此也、是以心駭目動而違常禮、禮者庶於仁、文質而成體者也、今使二人相食、大失其仁、安著其禮、方救其質、奚恤其文、故曰、「當仁不讓、」此之謂也、下略

繁露竹林

民の餓えて相食らうを聞いて、心痛み窮狀の解消を願うは「人の情」である。子反の措置——慘狀に驚き「其の容を失し」「其の間を計るなく」してなされた專斷に非難可能性はない。むしろ、仁を行なうに急であつた、その心情を稱讃すべきである、という。

公羊傳——董仲舒の見解には、力の否定（春秋之所惡者、不任德而任力）や重民思想（害民之大者、惡之大也）も底流するであろう（繁露竹林・王道、文十八、僖十九）。が、いづれにせよ、純粹な動機の前には君臣の倫理も百歩を譲るべしとされ、「君を輕んじ」「政を専らにする」に至つたあしき結果を死角に没して、よき意志の故にその行爲を是認すべきを強調する。

君主を無視した專斷を、動機主義の立場から可とするこの見解は、例えば後漢書にも引かれ、鍾離意曰、昔華元・子反、楚宋之良臣、不烹君命、擅平二國、春秋之義、以爲美談、と、春秋の正統的解釋として定着している。

王望傳

## ②行爲の中斷

純粹な動機、よき志向にもとづく行動も、必ずしも完了に至らない。熱意の消滅、方法の拙劣などのため、みずから斷念した場合は、行爲者じしんが責に任ずべきかもしれない。問題は、他者の妨害、本人の死亡など不可抗力によって、中途で斷絶した場合である。行爲が完了すれば、稱讃を博したであろう善事が、中斷せしめられたが故に、よき意志が判然せず、かえって惡罵をこうむりかねないケースもあろう。行爲の挫折のためよき意志が埋没し、曲解されるおそれある時、春秋はいかにしてそのよき意志を顯彰するのであろう。

春秋においては、よき意志は無條件的に價值である。とすれば、よき意志は、現實には實現されない場合でも、理念の

國家においてはその價值性が承認されるであらう。現實の歴史を存在の世界とみるならば、理念の國家は當爲の世界であり、そこでは價值は價值として正しく位置づけられ、非價值は非價值として嚴しく排斥するべきであるから。

ところで、春秋は、「事に託して義を張り」歴史をかりた理念の書、であつた。春秋の構想するのは當爲の世界、理念の國家にはかならない。

現實の歴史に實において實現されなかつたよき意志は、春秋の文に理念の國家において成就され、價值は正しく價值としての地歩を與えられる。行動そのものが實において中斷された場合、よき意志をば春秋の文において成就させ、以てその價值性を立證せんとする。これが「其の意を成す」の書法である。

行爲の中斷した時、單に「其の意の如く」に書いてよき意志を表わすよりも、理念の國家に春秋の文において「其の意を成す」——そのよき意志を成就させるならば、よき意志がそれじたい價值であるとの主張は、一そうはつきり辯證されるであらう。（春秋の文と實とについては僖元・二・十四、文十四、宣十一、定元）。

#### A 其の意を成す

行爲の挫折のため、よき意志が實現されないのみか、埋没し曲解されるおそれがある時、「其の意を成し」て顯彰せんとする書法と論理は、隱公の即位——讓國の意志——をめぐって、執拗なまでに繰りかえされる。

周の平王四十九年（隱公元年）、魯の惠公を繼いだのが隱公である。既述のごとく、春秋の義例は、弑せられた君を繼いで立てば「公即位」を書かない。惠公は弑せられたのではない。だから隱公には「公即位」を書くべきである。然るに、

〔經〕元年、春王正月、

隱公元年

と。正月、隱公の即位の禮の行なわれたのは事實である（隱元注・疏）のに、「公即位」が書かれていない。これについて公羊は傳を發して曰く、

〔傳〕（隱）公何以不<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、成<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>也、

〔注〕以<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>正月而去<sub>中</sub>即位<sub>上</sub>、知<sub>二</sub>其成<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>、何成<sub>二</sub>乎公之意<sub>一</sub>、公將<sub>三</sub>

平國而反之桓、曷爲反之桓、桓幼而貴、隱長而卑、其爲尊卑也微、〔注〕母俱廢也、國人莫知、隱長又賢、諸

大夫拔隱而立之、隱於是焉而辭立、則未知桓之將必得立也、

〔注〕是時公子非一、且如桓立、則恐諸大夫之

不能相幼君、故凡隱之立、爲桓立也、

〔注〕凡者、凡上所慮二事、皆不可、故於是已立、欲須桓長大而歸之、故

曰爲桓立、明其本無受國之心、故不書即位、所以起其讓也、

隱長又賢、何以不宜立、立適以長、不以賢、

立子以貴、不以長、下略 隱公元年

惠公の薨じた時、適夫人に子がなく、諸大夫は隱公を立てようとした。隱公には位に即くの意志なく、固辭した。

「子を立つるに貴を以てし、長を以てせず」、すなわち、適夫人に子のない時、右媵の子を立て、右媵に子がなければ左媵の子を、左媵に子がなければ適姪姉、さらに右媵姪姉、左媵姪姉の子を立てる。王位繼承にまつわる紛争防止のため定められた禮制である（隱元何注）。

隱公は左媵の子、桓公は右媵の子（隱元何注）、桓公を置いて隱公が立つのは禮の精神に反する。隱公の國を受けるを肯ぜざる所以である。だが隱・桓の尊卑は微差、桓公は幼少のため、諸大夫はすでに冠して賢なる隱公の即位を強く望んだ。もし隱公が拒否すれば、群公子のうち果して桓公が立つことができるかいなか、諸大夫が幼ない桓公を輔佐してゆくかどうか。情勢を憂慮した隱公は、權道として己が即位して國家を安定させ、桓公の成長をまって讓位しようと意圖した（繁露竹林・王道）。要するに、「隱公の立ったのは桓公のため」であり、「國を平めて桓公に反さん」とした、というのが公羊學の狀況設定である。

ところが、即位して十一年（712B.C.）、隱公は弑殺され、國を讓るの事は實現に至らなかった。國を讓るの事は實現しなかったが、國を讓らんとしたよき意志は、春秋の文によって成就され、顯彰されることとなる。

よき意志を成就せしめるため、春秋は五回にわたって特別の筆法を用いる。公羊はそのつど傳を發して、これは「公の意を成す」——隱公の讓國の意志を成就せしめんとするものである、と強調する。

上掲の元年正月の經文に、「公即位」を書かないのが、その第一である。

公羊傳に「公、何を以て即位を言わざるや。公の意を成さんとなり。云云」と。隱公には「もと國を受くるの心なし、故に即位を書せず」（隱元注）。これによつて國を譲らんとする意志を説き起こしたのである、と何休は云う。

その第二は、元年七月の書法である。

〔經〕秋七月、天王使<sub>レ</sub>宰咺來歸<sub>レ</sub>惠公・仲子之贈、  
〔傳〕上略 仲子者何、桓（公）之母也、何以不<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>夫人、桓

未<sub>レ</sub>君也、中略 桓未<sub>レ</sub>君、則諸侯曷爲來贈<sub>レ</sub>之、隱（公）爲<sub>レ</sub>桓立、故以<sub>二</sub>桓母之喪<sub>一</sub>、告于諸侯、然則何言爾、成<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>也、  
〔注〕尊<sub>二</sub>貴桓母<sub>一</sub>、以下赴<sub>二</sub>告天子諸侯<sub>一</sub>、彰<sub>二</sub>桓當<sub>レ</sub>立、得<sub>中</sub>事之宜<sub>外</sub>、故善而書<sub>二</sub>仲子<sub>一</sub>、所<sub>下</sub>以起<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>、成<sub>中</sub>其賢<sub>外</sub>、

「桓公の爲に立つた」隱公は、桓公の母・仲子を尊び、夫人の禮に準じて、天子・諸侯にその喪を赴告した。これによつて桓公の當に立つべきを明らかにしようとしたのである。春秋はそれを善として「仲子」と書いた。この書法は「公の意を成す」——隱公の讓國の意志を成就せしめんとする所以である、という。

第三は、隱母の卒葬についての書法である。

〔經〕（二年）十有二月、乙卯、夫人子氏薨、  
〔傳〕夫人子氏者何、隱公之母也、何以不<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>葬、成<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>也、何

成<sub>二</sub>乎公之意<sub>一</sub>、子將<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>終爲<sub>レ</sub>君<sub>一</sub>、故母亦不<sub>二</sub>終爲<sub>レ</sub>夫人<sub>一</sub>也、  
〔注〕時隱公卑<sub>二</sub>屈其母<sub>一</sub>、不<sub>下</sub>以<sub>二</sub>夫人禮<sub>一</sub>葬<sub>レ</sub>之、以<sub>二</sub>妾禮<sub>一</sub>葬<sub>レ</sub>

之、以<sub>二</sub>卑<sub>下</sub>下桓母<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>終爲<sub>レ</sub>君之心<sub>一</sub>、得<sub>中</sub>事之宜<sub>外</sub>、故善而不<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>葬、所<sub>下</sub>以起<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>而成<sub>中</sub>其賢<sub>外</sub>、 隱公二年

隱公は己じしん終に君たらざらんとしたので、母の子氏が卒した時、妾の禮をもつて葬り、夫人の禮に國君の母たる禮式を用いなかった。これを善とする春秋は（卒と葬とを書けば夫人の禮となるので）、子氏の卒を記するのみで、葬を書いていない。つまり、葬を書かないことによつて「公の意を成す」——隱公の位を譲らんとしていた意志を成就せしめんとしたのである。

第四は、仲子の廟を作ったことの記録である。

隱公は、五年九月に、桓公の母・仲子の宮廟を立てた。夫人の禮である。生前の仲子は右媵にすぎなかったし、その子

桓公はまだ即位していない。通常ならば妾禮をもって遇する所である。だが「桓公の爲に立つた」との意識は、桓公の爲にその母を尊び廟を立てて祭った。桓公の立つべきを彰らかにする所以である。これを善とする春秋は、

〔經〕（五年）九月、考仲子之宮、  
 其母也、然則何言爾、成公意也、  
 〔傳〕上略 桓（公）未君、則曷爲祭仲子、隱（公）爲桓立、故爲桓祭

成其賢也、 隱公五年

と。要するに、春秋は「仲子の宮（廟）を考す」を書くことによって、「公の意を成す」——國を桓公に返さんとしていた隱公の意志を成就させようとしたのである、という。

第五は、隱公二年から十一年まで、ことごとく「正月」の二字を去った書法である。

隱公は、十一年十一月、桓公の弑するところとなった。そのため讓國の事はついに實現されなかった。が、「國を平めて桓公に反さん」とする意志に變わりはなかった。しかし、上述の四たび（隱公元年正月・七月、二年、五年）の「（隱）公の意を成さん」とした書法は、讓國の意志が、初期にはあつた證左となるも、果して最後まで一貫して存したかどうか、嫌疑なしとしない。終始一貫、國を讓らんとする意志の存続したことは、隱公二年から以後、末年まで、經文に「正月」の二字がすべて除かれていることによって明證される、と公羊學は説く。

〔經〕（十一年）冬十有一月、壬辰、公薨、  
 月也、  
 〔傳〕上略 隱（公）何以無正月、隱將讓乎桓、故不有、其正

「正月」は、君主が「象魏を縣け、教令を出すの月」である。が、隱公には讓國の意あるが故に、「二年より以後、隱公の篇を終るまで、常に正月を去って、以て之を見わし」たのであり（隱元徐疏）、「正月を言わざるは、其の志に従って以て其の事を見わし、賢の志に従って以て其の善を達せん」とするものである（繁露玉英）。

元年に正月を書いたのは「公、時に實に即位の禮を行なつた」からであり、それは「民臣の心を厭足させる」ためであ

った。しかし、二年から末年まで正月を去ったのは、元年に「公即位」を去ったことなどと共に、

以下不<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>正月<sub>一</sub>而去<sub>二</sub>即位<sub>一</sub>、知<sub>二</sub>其成<sub>二</sub>公意<sub>一</sub>、

隱公元年注

と何休も指摘するごとく、「公の意を成す」——國を譲らんとしていた隱公の意志を成就せしめる所以の書法とされる。

以上、隱公の果されなかつたその意志を、春秋は筆法によって成就せしめんとする、と公羊は五たび繰りかえして説く。國を譲るの事は途中で挫折しても、國を譲らんとした意志が春秋の文において成就されるならば——春秋が「其の（よき）意を成す」ならば、それはただ「其の（よき）意の如く」に書するよりも、よき意志の價值性の立證としては、はるかに説得力をもつであらう。

## B 其の意を致す（一）

「其の意を成す」は、行爲の挫折した場合、それを爲そうとした意志を、春秋の文において成就せしめんとする書法であつた。この論理を一步進めるならば、挫折した行爲をも實現させて、その（よき）意志を成就せしめる、ということにならう。何となれば、よき意志の價值性の明證には、よき意志による行爲の實現の提示が最も効果的であるから……。挫折した行爲を春秋の文において實現させることにより、よき意志にもとづく行爲は必ず實現されることを提示して、よき意志がそれ自體價值であることの確證とする。これが「其の意を致す」の筆法である。その事例として鄆の會に趣いた鄭伯が擧げられる。

襄公七年（563.B.C.）、魯・晉・宋などの諸侯が鄆の地に會した。鄭伯髡原（僖公）はこれに參會しようとして、大夫に「中國は歸するに足らず、楚に與するに若かず」と強く反對された。だが蠻夷の楚に従うを潔しとしない鄭伯は、あくまで鄆の會に馳せ參じようとした。そのため途中で大夫に弑され、操（鄭の邑）の地で卒した。中國を慕って會に行こうとした鄭伯の意志を善とする春秋は、これを書いて、

〔經〕十有二月、公會晉侯・宋公・陳侯・衛侯・曹伯・莒子・邾婁子于鄆、鄭伯髡原如會、未見諸侯、丙戌、卒。

于操、〔傳〕上略 鄭伯將會諸侯于鄆、其大夫諫曰、「中國不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>歸也、則不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>楚、」鄭伯曰、「不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>、」其大夫曰、「以<sub>レ</sub>中國爲<sub>レ</sub>義、則伐<sub>レ</sub>我喪、以<sub>レ</sub>中國爲<sub>レ</sub>疆、則不<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>楚、」於是弑<sub>レ</sub>之、中略 未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>諸侯、其言<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>會何、致<sub>レ</sub>其意也、

〔注〕鄭伯欲<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>中國、意未<sub>レ</sub>達而見<sub>レ</sub>弑、故養遂而致<sub>レ</sub>之、所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>賢者之心、

襄公七年

と。鄭伯は會に趣かんとしたが果さず、意いまだ達せずして道に弑せられた。春秋は「其の意を致して」、「會に如く」と書いた。賢者の心を達する所以である。現實には果し得なかった「會に如く」のことは、春秋の文において實現され、その意志は達成せられた。このことは春秋繁露にも（觀德）、次の如く述べられている。

鄭僖公方<sub>レ</sub>來會、我而道殺、春秋、致<sub>レ</sub>其意、謂<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>會、

さて、「鄭伯髡原如<sub>レ</sub>會、未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>諸侯、」の經文を、公羊學は「其の意を致す」の書法と解している。が、これを分解すると、鄭伯は「未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>諸侯、」——その行爲は事實として成就しなかった。しかし書して「如<sub>レ</sub>會」と——春秋の文が行爲を成就せしめて、其の意を達成する。つまり、「其の意を致す」の書法は、「成事の文を上<sub>レ</sub>に爲し、不成事の實を下<sub>レ</sub>に見<sub>レ</sub>す」もの、と云えよう（桓公十年公羊通義）。この書法は春秋に數多く見える。左に若干例示しておく。

〔經〕公會衛侯于桃丘、弗<sub>レ</sub>遇、公羊通義曰、「未<sub>レ</sub>會而言<sub>レ</sub>會者、致<sub>レ</sub>本意也、猶<sub>レ</sub>云晉人納<sub>レ</sub>接甯于邾婁、弗<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>納、丁巳、

葬我君定公、雨不<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>葬、皆爲<sub>レ</sub>成事之文於上、見<sub>レ</sub>不成事之實於下、

桓公十年

〔經〕晉人納<sub>レ</sub>接甯于邾婁、弗<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>納、文公十四年

〔經〕十月己丑、葬我小君頃熊、雨不<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>葬、宣公八年

〔經〕九月丁巳、葬我君定公、雨不<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>葬、定公十五年

### ③行爲の未着手

上述の鄭伯は鄆の會に趣いたが、道に弑せられ行爲が中斷され、事は實現しなかった。しかし春秋の文がその事を成就させ「其の意を致した」のであった。然らば行爲の中斷でなく、その意ありてその事を爲す能わすいまだ行爲に着手



しなかった場合、春秋はどのようにしてその意志を達成させるのであろう。

### A 其の意を致す(二)

具體的な事例として、晉の文公「曹を侵す」の筆法を検討しよう。僖公二十八年に、

〔經〕春、晉侯侵<sub>レ</sub>曹、晉侯伐<sub>レ</sub>衛、〔傳〕曷爲再言晉侯、非<sub>レ</sub>兩<sub>レ</sub>之也、然則何以不<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>遂、未<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>曹也、未<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>曹則其言<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>曹何、致<sub>レ</sub>其意也、其意侵<sub>レ</sub>曹則曷爲伐<sub>レ</sub>衛、晉侯將<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>曹、假<sub>レ</sub>塗于衛、衛曰不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得、則固將<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>之也、

〔注〕曹有<sub>レ</sub>罪、晉文行<sub>レ</sub>霸征<sub>レ</sub>之、衛疆過不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>義兵以<sub>レ</sub>時進、故著言<sub>レ</sub>侵<sub>レ</sub>曹、以致<sub>レ</sub>其意、所<sub>レ</sub>以通<sub>レ</sub>賢者之心、不<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>壅塞也、

覇者の晉侯（文公）は曹の罪を膺懲しようとした。しかし衛が塗をかさず、義兵を進めることができない。それで、まず衛を伐った。春秋はこれを書して「晉侯侵<sub>レ</sub>曹、晉侯伐<sub>レ</sub>衛」と。もし侵<sub>レ</sub>曹と伐<sub>レ</sub>衛とが連續して爲された事ならば、例えば「侵<sub>レ</sub>蔡、遂伐<sub>レ</sub>楚」（僖四）のごとく、遂で接續するのが通例である。ここに遂を用いないのは、「曹を侵す」の事が爲されていないからである。いまだ爲されざる事を、すでに爲された事として「晉侯侵<sub>レ</sub>曹」と書いたのは、その本意の曹を侵すにあるを明らかにせんとしたのである。言いかえるならば、爲す能わざりしその事を、春秋が爲さしめることによって、現實には達成されなかった（よき）意志を、理念の世界に春秋の文において「其の意を致した」——達成せしめたのである。

さきの鄭伯の場合は（襄七）、すでにその事に着手したが完了に至らなかったため、その意を致して上に「成事の文」をなし、下に「不成事の實」を示したのであった。しかしここでは、晉侯が衛をば伐ったが、曹を侵すの事はまだ全く爲されなかったため、その意を致して上に「晉侯侵<sub>レ</sub>曹」と成事の文をなすも、下に遂を用いないことによって、曹を侵すの事がまだ爲されていない實を現わしたのである。

### B 其の意を遂ぐ(一)

晉侯「曹を侵す」は、その意ありてその事の爲されざりし場合であるが、それは己れ自身が事を爲さんとしたのであつ

た。もし人をして行なわしめんとして、その事を行なわしめる能わざりし時、春秋はいかにしてその意を遂行せしめるのか。これに應えるのが「其の意を遂ぐ」の筆法である。

魯の文公は公孫敖を京師に使いせしめんとした。が、公孫敖は君命を無視して往こうとしなかった。このことを春秋は書して、

〔經〕公孫敖如<sub>レ</sub>京師、不<sub>レ</sub>至復<sub>レ</sub>、丙戌、奔莒、

〔傳〕不<sub>レ</sub>至復者何、不<sub>レ</sub>至復者、内辭也、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>往也、〔注〕

安<sub>レ</sub>居不肯行、故諱使<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>已行、但不<sub>レ</sub>至還<sub>レ</sub>爾、即<sub>レ</sub>已行、當<sub>レ</sub>道所<sub>レ</sub>至乃言<sub>レ</sub>復、如<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>黃矣、

文公八年

不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>往則其言<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>京師

と。「至らずして復る」は、あたかも中途まで行き、目的地に至らずして引き返したかのようなものであるが、これは「往か使むべからざるの恥を諱ん」だ表現である（公羊義疏）。もし眞實行き中途から復ったのならば、例えば、

公子遂如<sub>レ</sub>齊、至<sub>レ</sub>黃乃復、

宣公八年

のごとく、「至りし所を道い、乃ち復ると言う」のが、春秋の通例である。従つて經文に、至りし所の地名を擧げないのは、公孫敖が一步も往かなかった事實を明かすこととなる。

公孫敖は京師に往かなかった。しかるに「如<sub>レ</sub>京師」と書したのは、春秋が「文公の意を遂げ」させたのである、という。すなわち京師に如かしめんとした「公の意を遂げ」させるため、春秋は上に「如<sub>レ</sub>京師」と成事の文をなし、下に「不<sub>レ</sub>至復」と書して、その事を行なわしめる能わざりし實を示したのである。

### C. 其の意を遂ぐ(二)

「其の意を遂ぐ」の筆法については、僖公二十八年にも説かれている。

晉が衛を伐つた（傳二十八）。時に衛は楚の同盟國、魯は楚と婚姻を結んでおつた。それで、魯の僖公は衛を救援せんとして、公子買に往きて衛の守備に當るよう命じた。だが晉を畏れる公子買は君命を廢して往かなかつた。それ故、僖公は公

子買を殺した。春秋はこれを書して、

〔經〕公子買戍衛、不卒戍、刺之、

〔傳〕不卒戍者何、不卒戍者、内辭也、不可使往也、

〔注〕卽往

當言戍衛不卒、

不可使往則其言戍衛何、遂公意也、

〔注〕使臣子不可使、恥深故諱、使若往不卒竟

事者、明臣不使塞君命、

僖公二十八年

と。「戍りを卒ず」とは、公子買を往かしめることすらできなかったのを諱んで、あたかも、「往きて事を卒竟さる者の若き」表現をなしたのである。實は、往きて衛を戍らしめる能わざりしに「戍衛」と書いたのは、春秋が「僖公の意を遂げ」させたのである、という。

以上、縷説したごとく、その意ありてその事を爲せしが途中で挫折した場合（隱公の讓國、鄭伯會に如く）、その意あるもその事を爲す能わざりし場合（晉侯曹を侵す）、その意あるもその事を爲さしむる能わざりし場合（公孫敖京師に如く、公子買衛を成る）、いずれも、春秋は「其の意を成し」「其の意を致し」「其の意を遂げ」させる。事の挫折ないし不能によって意の埋没を恐れる春秋は、文において、その意を達成遂行せしめ、以てよき意志の價值性を明證せんとする。それは、何休によると、「其の意を起して其の賢を成す所以」であり（隱元・二・五）、「賢者の心を達する所以」であり（僖二八・襄七）、また「君命を壅塞せしめざる」所以とされる（文八・傳二八）。公羊學の君臣觀や國家論、賢者や霸者に對する見方などにも關連する問題であらう。が、いずれにせよ、特異な筆法と論理は、行爲における事の成否や結果にかかわらず、その意を極度に重視し、よき意志を顯彰せんとする立場の所産である、と云えよう。

## 五

よき意志＝價值の必ず達成・遂行せられるべきを驗證するために、「其の意を致す」（其の意を成す・其の意を遂ぐ）の筆法を用いた春秋は、あしき意志＝反價值の必ず豫防・禁絶さるべきを主張して、また獨特の論理を提起する（形式的には禮

制に悖らない、いわば適法行爲であつても、そこに非道德的な動機や心情を混える場合、春秋の指彈をまぬがれないことは、もはや論ずるまでもなからう—文二「公子遂如<sub>レ</sub>齊納幣」、繁露玉杯參照。ここでは君父弑殺のごとき甚惡なものについて主として述べることにする。

### A 未然の前に貶す

隱公十一年(712B.C.)、魯の公子翬は、隱公を「讓國の意なし」と讒言し、桓公を教唆してこれを弑殺させた。然るに春秋は隱公四年に、

〔經〕秋、翬帥<sub>レ</sub>師會<sub>二</sub>宋公・陳侯・蔡人・衛人<sub>一</sub>伐<sub>レ</sub>鄭、

〔傳〕翬者何、公子翬也、何以不<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>公子<sub>一</sub>、貶、曷爲貶、

與<sub>レ</sub>弑<sub>二</sub>(經)公也、

〔注〕弑者、殺也、臣殺<sub>レ</sub>君之辭、以下終<sub>二</sub>隱之篇<sub>一</sub>貶<sub>レ</sub>上知<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>弑<sub>二</sub>(隱)公也、

また隱公十年において、

〔經〕夏、翬帥<sub>レ</sub>師會<sub>二</sub>齊人・鄭人<sub>一</sub>伐<sub>レ</sub>宋、

〔傳〕此公子翬也、何以不<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>公子<sub>一</sub>、貶、曷爲貶、隱(公)之罪人也、

故終<sub>二</sub>隱(公)之篇<sub>一</sub>貶也、

〔注〕嫌<sub>レ</sub>上<sub>一</sub>貶可<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>於他事<sub>一</sub>者、故終<sub>二</sub>隱之篇<sub>一</sub>貶<sub>レ</sub>之、明爲<sub>レ</sub>隱貶、所<sub>二</sub>以起<sub>二</sub>隱之罪人<sub>一</sub>也、

隱公の弑殺されたのは十一年であるのに、春秋はそれ以前に(四年・十年)、弑殺に關與した翬を豫め貶している。これは、未だ然らざるの前に貶するの筆法とされる。

同様に、魯の公子慶父が子般(魯の莊公の子、未踰年の君)を弑したのは、莊公三十二年(682B.C.)である(莊三二、閔元公羊傳)。しかるに、春秋は、はや莊公二年「公子慶父、師を帥いて於餘丘を伐つ」において貶絶を加えている(莊二徐疏)。これもまた、未だ然らざるの時に於いて、豫め貶するの筆法である。

例えば又、春秋は祿位の世襲を排し、世卿を否認する(昭三一、隱三、宣十公羊傳)。世卿は人材登庸の途を塞ぎ、士氣の沈滞・官界の腐敗を招き、その跋扈はやがて「君の威權を奪い」廢立・弑君に至るであらう(隱三、傳二五何休注)。「其の末を疾んで、其の本を正さん」とする春秋は(隱三、傳二五何休注)、未だ然らざるの時に於いて、豫め警戒をたれる。すなわち、周の世卿の尹氏が「王子朝を立<sub>レ</sub>」は昭公二十三年(529B.C.)であるが、春秋は遙か前の隱公三年(720B.C.)「尹氏卒す」

において、豫め尹氏に貶絶を加える。また「齊の崔杼、其の君光（莊公）を弑す」は襄公二十五年（548B.C.）であるが、宣公十年（538B.C.）「齊の崔氏、衛に出奔す」で、未然に世卿の崔氏を貶している。以上の諸例については錢大昕も、凡纂弑之事、必有其漸、聖人隨事爲之杜其漸、隱（公）之弑也、於三疊帥師戒之、子般之弑也、於三公子慶父帥師伐於餘丘戒之、此大夫不得專兵柄之義也、尹氏立王子朝、在昭公之世、而書尹氏卒於隱（公）之策、崔杼弑君、在襄公之世、而書崔氏奔衛於宣（公）之策、此卿不得世之義也、

潛研堂文集・答問

と、その筆法に言及している。魯の公子翬・公子慶父・周の尹氏・齊の榘杼は、いずれも弑君（廢立）の大惡を犯すに至るが、春秋はその遙か前に貶し、未だ然らざるの時に警告している。事前に貶すことによって「其の漸を杜ぎ」「豫め之を防ぐ」べきを説いたのである。

### B 將に然らんとして未だ形われざるの時に於てす

およそ「百亂の源はみな嫌疑纖微に出で、漸寢を以て稍く長じて大に至る」ものであろう。故に聖人は「その微なる者を別からち、その纖なる者を絶つ」という（繁露度制）。現實問題としても、事の至る前に「漸寢を防ぎ」「微細を絶つ」が最上の豫防策とされる。莊公十八年に、

〔經〕夏、公追戎于濟西、

〔注〕以兵逐之曰追、

〔傳〕此末有言伐者、

經義述聞云、言字後人所加、其言

追何、大下其爲中國追也、此末有下伐中國二者、則其言爲中國追又何、大下其未至而豫禦之也、其言于濟西何、大之也、〔注〕大言除害、恩及濟西也、言大者、當有有功賞也、

魯の莊公が武力をもって戎を驅逐した。それは、未だ至らざる戒であり、侵略の事實はない。だが公羊は、中國のために「未だ至らざるに豫め之を禦ぐを大とする」という（漢書辛慶忌傳、公羊通義）。

これは、いまだ至らざる夷狄を豫め討伐した例であるが、一般に、公羊説は、その危險性ありて未だ現實化せざるの時に於いて、豫め之を禁絶するを善とする（桓元、僖十七何休注）。この立場は、春秋繁露に（注は蘇興の義證による。一文の解釋

は凌辱も蘇興と異ならない。

兵已加焉、乃往救之、則弗美、謂之機之役、未至豫備之則美之、謂之濟西之役、善其救害之先也、夫救蚤而先之、蚤疑作害、則害無由起、而天下無害矣、然則觀物之動、而先覺其萌、絕亂塞害、於將然而未形之時、春秋之志也、  
繁露・仁義法

「齊人が魯の西鄙を侵し」、僖公が「齊師を追って濶に至つ」たのが、いわゆる濶の役である（僖二十六）。それは、齊の兵甲がすでに魯を侵し、然る後に追撃したので、春秋は善とせず。しかし濟西の役は、いまだ戎兵が至らざるに、莊公が豫めこれを驅逐した。「患を思いて豫め之を防ぎ」（繁露・兪序）、「將に然らんとして未だ形われざる」の時に禍害を除くするは、春秋の善とする所である、という。

夫覽三求微細於無端之處、誠知小之將爲大也、微之將爲著也、

繁露・二端

微細を「冥冥に視、無聲に聴き」「物動きてその化を知り、事興りてその歸を知る」が賢智として要請される（繁露・王道・必仁且智）。公羊學が將——將に然らんとして未だ形われざる——の時に、「微細を絶つ」べきを主張する所以である。この主張は、春秋二百四十二年のうち、弑君三十六・亡國五十二は、すべて微細を未然に根絶せざるに由來する、との歴史認識に裏づけられ（繁露・度制・盟會）、「將を誅す」の特異な論理に進展する。

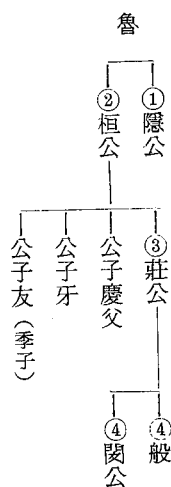
### C 將すれば誅す（一）

將（まさにせんとす）を禁絶すべしの主張は、とくに君親の弑殺をめぐる尖鋭な表現となる。

春秋之義、君親無將、將而必誅、

鹽鐵論晁錯、論衡恢國、漢書董賢傳、後漢書樊豐傳

「君親には將にせんとするなし、將にせんとすれば必ず誅す」——君や親に對しては殺害の念をいだくだけでも誅する、と。これは、むろん、公羊傳（莊三三、昭元）の文である。



莊公三十二年によると、魯の莊公の病あつきとき（莊公の

死は三年八月）、公子牙は世子の般を弑して公子慶父を立てようとする謀略をいだいた。これを察知した季子は、公子牙を誅殺した（三年七月）。これについて公羊は傳を發して曰く、

〔傳〕上略 公子牙今將爾、

〔注〕今將欲殺、

辭曷爲與親弑者同、

〔注〕親、躬親也、

君親無將、將而誅焉、

〔注〕親、父母、

莊公三十二年

〔傳〕上略 殺公子牙今將爾、季子不<sub>レ</sub>免、中略 將而不<sub>レ</sub>免、遏<sub>レ</sub>惡也、

義疏曰、言將者、事未<sub>レ</sub>形而意先至、故殺<sub>レ</sub>之

以絕<sub>三</sub>其萌<sub>一</sub>、所以止<sub>レ</sub>亂也、

閔公元年・二年

公子牙は「今、將にせんとするのみ」——將に君を弑せんと欲したにすぎない。將（まさにせんとす）とは、「事いまだ形われずして意まず至る」の段階である。將——內的意志のみにすぎない公子牙を、既にみづから君を弑した者——實行した場合と同列に扱うのは、君と親とに對しては將すら必誅する春秋の義による、とされる。

春秋の義を支えるのは、君臣、父子の道德に對する不可侵的な嚴格主義であらう。問題はその不可侵性を固守するための發想と論理である。すなわち、春秋が君と親とに對する將を必誅するのは、「惡を遏めんとなり」。公子牙の將（まさにせんとするのみ）——意志に誅を加えた、季子の處置が是認されるのは、「その萌を絶つ」ことによって、不祥事を未だ然らざるの前に防止せんとしたためである、という。

D 將すれば誅す(二)

將<sub>二</sub>事いまだ形われずして意まず至るを誅して、惡<sub>二</sub>反價值を未然に禁絶すべし<sub>一</sub>の立場は、昭公元年に、より明確な形で再論される。

陳の公子招が世子の偃師を殺したのは、昭公八年（634B.C.）のことである。だが、このために公子招は昭公元年で豫

め貶せられている。その理由を、公羊傳は次のごとく説く。

〔經〕叔孫豹會晉趙武・衛石惡・陳公子招・許人・曹人于渾、〔傳〕此陳侯之弟招也、何以不稱弟、貶、曷爲貶、爲殺世子偃師、曰、「陳侯之弟招、殺陳世子偃師」、大夫相殺稱人、此其稱名氏以殺何、言將自是弑君也、

〔注〕明其欲弑君、故令與弑君而立者同文、今將爾、詞曷爲與親弑者同、君親無將、將而必誅焉、昭公元年

世子（嫡子）は君の副貳である。世子偃師を殺した（昭公八年）ことからして、公子招に「君を弑せんとする心」あるは明らかとなった（昭元徐疏）。「君を弑せんとする心」あるが故に——大夫相殺は人を稱する（例えば、陳人殺其公子禦寇、莊三二）を通例とするが、——八年に春秋は「經、陳侯之弟招、陳の世子偃師を殺す」と、君を弑して立った者と同じ表現を用いた。「將に（君を弑）せんとするのみ」にすぎない者を、既にみずから君を弑した者と同じ視するのは、「君親無將、將而必誅」の春秋の義による、という。つまり、昭公八年に、公子招が世子を殺したことから、「將に君を弑せんと欲す」||將と推断する。そして、この將（まさにせんとする）||意志に對して、「將すれば必誅す」の原則のもと、昭公元年において、豫め公子招に貶絶を加えたわけである。

將||「事いまだ形われずして意まず至る」にすぎないものを必誅し、あしき意志||反價值は「將に然らんとして未だ形われざるの時に」豫め貶絶すべきを説く。行爲事實にかかわりなく内部心意のみを問題視する、春秋の論斷の究極であり、「心を原<sup>もと</sup>て罪を定める」立場の徹底とも見られよう。しかしこれも、よき意志||價值は——その意さえあればその事はなされなくとも——「其の意を致し（其の意を成し・其の意を遂げ）て顯彰する筆法と、論理的には對偶をなすものであらう。

## 六

行爲の外的事實にかかわりなく、内部意志を重んじ、これを唯一の根據として行爲の善惡を評價するならば、動機主義・主觀主義としては徹底したものと云えよう。公羊學の論斷も、この段階にとどまるならば、とくに異とするにたらぬ



判斷方式かもしれない。が、公羊のそれは、動機の純不純・意志の有無を審覈して「其の意の如く」に書するにとどまらなかった。その意ありて、その事の挫折したり爲されざりし時、あるいは爲す能わざりし場合、春秋は筆法によって「其の意を成し」「其の意を致し」「其の意を遂げ」しめる、という。よき意志の存在と價值性の明證のためには、現實には中斷や不能の行爲をも、春秋の文において實現・完成せしめることを辭さない。それほどに、よき意志を重視し、顯彰せんとする要求は熾烈である。他方、あしき意志Ⅱ反價值は未然に貶絕すべきを説き、「將に然らんとして未だ形かたちわれざるの時に」豫防するを最上とし、將（まさにせんとす）Ⅱ「事いまだ形われずして意ます至る」を必誅すべし、と主張する。

意志の極度の重視が生んだ特異な論理には、讖緯説の影響を看過できない。前漢の董仲舒から後漢末の何休に至る、公羊學の展開と屈折には、豫言的な讖緯説、なかんずく、未だ然るの前を論ずる災異思想のロジックが介在する（詳細は他稿にゆずる）。

いずれにせよ、行爲における意志のみを問題視する判斷は、純理的にも、自由意志を前提とする。強制からの自由は無論のこと、選擇意志としての自由が必須要件である。一定の知性と判斷能力をもち、選擇意志の自由を有する人格——それは民（冥）ではない。公羊學の倫理思想は、民から士大夫まで人間一般を對象としない。なべて儒家は、一般者の道德を説くこともないではないが、士大夫と庶民を區別する。すくなくとも公羊學は、士大夫と庶民とを同視して一様の道德を課することは、しない。公羊が自由意志を前提として、意志のあり方を厳しく追求するのは、士大夫の道德としてである。支配の座についた士人階級への道義的要請としてである。

中國の倫理思想で、動機や意圖を問わず可視的な結果を重んじ、客觀的事實を根據に論斷する立場の代表は、韓非子流の法家であろう。法實證主義的なその論斷の對極は、強いて求めるならば、儒教の倫理かもしれない。が、そのなかで、最も尖鋭なのは公羊である。客觀的事實や結果を全く無視して、内的心意のみを一方的に追求する判斷方式は、他の經傳にみられない、公羊倫理の特色であろう。